

世界を生きる



学校法人 渡辺学園 理事長
菅谷 定彦

日経米州編集総局長時代7

屈辱のバイン・バレー（米NJ） 大怪我のセントアンドルーズ （スコットランド）

2度のニューヨーク勤務で米国の名門ゴルフ場には時差を伴う過密な業務の息抜きのため、積極的に出かけたが、最悪のスコア125をたたいたのが、特派員時のニュージャージー州クレメントンのバイン・バレー・ゴルフクラブ。日本郵船ニューヨークの石川副支店長からのお誘いで、送られた地図を見ながらクイーンズの自宅から愛車ダッジ・ダートで1時間20分。岡村・郵船支店長・木戸・米国三菱商事社長・石川氏の4人でスタートした。

コースは写真（6番ホール）にあるようにティグラウンドから100ヤード前後は、砂地に高さ50センチから1メートルの硬い小木が全ホールにある。私の1番ティショットは小木の根元近くに入った。

出すだけでいいと8番アイアンで打ったところクラブが後方の小木の枝にひっかり空振り。第2打も当たったがブッシュから出きらず1ペナルティを払って前方に出したが、8をたたき、後も似たようなトラブル続きで125と生涯最悪のスコアで終わった。私よりゴルフの腕が下の木戸社長が124で回ったと言、「在NY日本人のトップ中、ナンバー1の菅谷に勝った。これから君とはゴルフはやらない。墓場に勝った記録を持っていく」とカードにサインをさせられた。終了後売店にいたプロに「タフなコースだね」と感想を述べると「ジャック・ニクラウスが2年前新婚旅行の時回ったスコアが81。しかし1年後にやってくる69を出した。君ももう1回来たら」と言われた。「ありがとう」と対応したが「2度と来るもんか」とつぶやいた。

バイン・バレーがゴルフ・ダイジェスト誌のグレイテストコースベスト10に入り続けているのは知っていたが、後から調べるとゴルフマガジン社の調査で1939年の全世界ランクでセントアンドルーズ、サイプレス・ポイント（米カリフォルニア州）に次ぎ世界第3位、2007年には第1位（この時セントアンドルーズは第3位）に輝いた名コースであることが分かった。

セントアンドルーズ・オールコースでのプレーは私が日本経済新聞取締役大阪本社編集局長に就任した1990年の秋である。日経の鶴田社長からの電話で「セントアンドルーズで開かれるダンヒル・カップ国別対抗のプロアマ戦に日本からの10人の1人として招待されたが、自分の腕では歯が立たない。終了後ダンヒル会長と同じティールでの会食もあり、ゴルフ、英語力とも日経ナンバーワンの菅谷君に行きたい」との要請を受けた。

事前にどのプロと回りたいかとの問合せがあり、私は迷うことなく当時USオープン2連覇で米国王コップ、カーチス・ストレンジ選手を指名した。日本人の他の9名はいずれも当時日本のトッププレイヤーの飯倉肇ら3選手と回っていた。プロアマ戦の第1組、ストレンジは左手からの強い風を意識、ボールが左方向に回るフックボールを打ちフェアウェイセンターに落としたのを見て、キャディが「ミ

SUGAYAの球筋は」と聞くので、「フェード（やや右手に行く）」と答えると「では左手18番ホールに向かつて打て。上空の風は地上の3倍」と言う。

しかし全ホール同時スタート（ショットガン方式）のため18番にはプレイヤーがいる。そこで私は左のラフを目指して打ったが、ボールは強風に流され右のラフの中へ。1ペナルティを加えての第3打も同じ方向へ。諦めて歩き出し、念のためボールをキャディと探したが、似たような場所にロストボールが10数個あるのに私のボールだけ発見できなかった。さらに1ペナルティで第5打を打ち、結局第1ホールはなんと9打。

当時の私の平均スコアは87、88だったから、難コースなので、目標スコアを99としていたが、スタートで大きく躓いた。そして最終18番ホールで事件が発生した。ティショットが右手の石畳の上に連なる円形の溝に止まったのだ。キャディに聞くとそのまま打つか、100ヤード戻ったところにある打ち直しティーから1打罰で打つかだと言う。

この段階での私の最終目標スコアは前述バイン・バレーでの125を1つ下回る124に後退していたが、後方のティーまで戻るとその達成は難しい。あがままに打てばチャンスはある。こう判断して7



▲セントアンドルーズでのプロアマ戦
向かって右は当時米国王ナンバー1のカーチス・ストレンジ選手

▼バイン・バレーGC（ニュージャージー州 クレメントン）6番ホール、ティグラウンドから（コース絵葉書）



番アイアンで打ったボールはまっすぐグリーン近くまで行きボギーで124に収まった。打った時火花が飛び散り、7番アイアンは一部欠けたが、右手に痛みはなかった。ダンヒル会長の正面に座らされた会食も、私が米州編集総局長時代、マンハッタンのダンヒル・ティラーでカシミアのコートを購入、寒いニューヨークの冬をしのいだ話など愉快に過ごしたが、18番ホールの1打が私の右腕と目に重大な怪我をもたらしたことが後日判明する。

次号

世界を生きる No.22
「日経米州編集総局長時代8」

To be continued